

## ASD 児における内的出来事の表出に関する検討 —ビデオを用いた叙述トレーニングの般化効果について—

加藤 隆規

### 1. はじめに

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder; 以下 ASD) に併存する精神障害は、精神症状に対する対症治療が功を奏しても、ASD 固有の対人コミュニケーション障害のため、その後、適応に至ることは困難な場合が多い。

ASD 児・者は、要求機能と比較して、叙述的機能を有するコミュニケーションの発達の遅れが顕著であることが指摘されている。言語を使うようになった場合でも、「要求」のような結果がはっきり見える言語行動 (マンド; mand) に偏る傾向があり、事実を相手に伝達する叙述的言語行動 (タクト; tact) が生じにくいことが幾つかの観察的研究によって示されている。

タクトは、公的出来事と私的出来事に分けられる。Skinner (1976) は、当該個人の皮膚の外で起こっている事象を公的出来事、個人の皮膚の中で起こっていることを私的出来事と定義している。従って、日常的な用語を使うならば、「私的出来事」とは“内的出来事”として解釈できると考えられるため、本研究では“私的出来事”を“内的出来事”として扱うこととした。

また、ASD 児・者は、他者の心的状態を理解することに弱さがあり、それが発達期に良好な人間関係を構築できないことにつながっていると思われる。自分の現在の内的状況を報告することは、神経発達症児自らが、その生活の質 (QOL) を向上させる上で重要な行動であると考えられる。

先行研究から、ASD 児が感情の原因 (事実) のタクトと内的出来事のタクトを獲得し、日常場面において般化を促進するためには、

内的刺激に対応して他者も観察可能な行動が生じる場面を設定し、実演することが望ましいと考えられる。しかし、ネガティブな感情語を取り扱うことは倫理上不適切であると考えられる。一方、場面設定を動画刺激により明確にした加藤・高浜 (2015) の研究においては、動画に対する 3 語文による報告言語行動が形成され、刺激内容を大きく変えた場面であっても、適切な表現で報告すること、実際の動作に対しても般化することが示唆された。このようなことから、動画刺激と視覚的プロンプトを用いてトレーニングを行うことで、般化を促進させられると考えられる。

よって、本研究では、動画刺激と視覚的プロンプトを用いて、感情の原因 (事実) のタクトと感情語のタクトを適切に言語表出する行動をトレーニングし、獲得および般化に至る条件を検討することを目的とした。

### 2. 方法

#### (1) 参加児

参加児は、文脈を保持するタクトと表情弁別のスキルを獲得している、ASD 児または ASD の疑いのある 4 名の児童であった。

#### (2) 手続きおよび場面設定

見本刺激である動画刺激に対して、単語あるいは文章を比較刺激とした構成反応見本合わせに基づくトレーニングを実施した。動画刺激として、「主語」「目的語」「述語」の 3 要素が含まれ、それぞれの感情語と対応する顔の表情を提示してある 10 秒～20 秒の動画を用いた。場面設定においては、参加児は椅子に座り、その横に MT が椅子に座り参加児の正面にノートパソコンを設置し動画刺激を提示した。

### 3. 結果

最初のトレーニングでは、感情の原因（事実）に対するタクトを形成した。しかし、トレーニング直後のテストでは、内的出来事に対するタクトを獲得した参加児はいなかった。次に、感情の原因（事実）と感情語を含めたタクトを形成した。その結果、全ての参加児において感情語の原因（事実）のタクトと感情語を含めたタクト獲得および般化に至った。参加児1名の結果を Fig.1 に示す。

本研究後のエピソードとして、3名の参加児は、自己感情においても、感情の原因（事実）と感情語を含めたタクトで言語表出する行動が観察された。

### 4. 考察

感情語の原因（事実）を含む内的出来事に対するタクトの獲得において、「主語」「目的語」「述語」で構成された感情の原因（事実）のタクトによる状況理解の獲得だけでは、感情語のタクトの表出は難しいことが示された。

構成反応見本合わせ手続きでは、動画刺激に対応した「主語・目的語・述語」を含んだ文や感情語が選択肢として提示された。選択肢は、動画刺激のどこに注目すればよいかのプロンプトとして機能した可能性が考えられ、状況と感情語の刺激間関係の学習を促進した要因の1つであると考えられる。しかし、2名の参加児においては、適切な弁別刺激（表情）に注目することが困難であった。

このことは、動画における必要な刺激に注目を促すことが出来なかったことが要因であると考えられたため、動画を一時停止し、

指さしと音声のプロンプトを行い、表情への注目を促した。その結果、適切な感情語の選択が可能になった。このことから、表情への刺激性制御の獲得を促進させ、文脈刺激（状況）と条件性刺激（表情）を含めた高次条件性弁別の形成に至り、感情の原因（事実）を含む感情語のタクトの獲得が促進されたと考えられる。

感情語の原因（事実）を含む内的出来事に対するタクトの般化の要因において、1つは、場面間に共通する内的状態（情緒的な反応）の存在である。本研究開始時点で、状況と内的状態（情緒的な反応）との刺激間関係は、すでに形成されており、トレーニングによって、高次条件性弁別が形成され、同じ内的な状態になる他の状況においても、感情語の表出が可能になったと考えられる。

もう1つの要因は、表情刺激への注目反応である。参加児の内的出来事のタクトにおいて、感情語のタクトが含まれていないか、状況に対応しない感情語のタクトであったため、動画に含まれる複数の刺激の中から、表情に注目することをいくつかの動画刺激で促したことで、未訓練の場面においても表情に対する注目反応が般化したと考えられる。

### 引用文献

加藤隆規・高浜浩二（2015）ASD 児に対する動画を用いた報告言語行動の指導，日本行動分析学会第33回年次大会発表論文集，

31.

Skinner, B. F. (1976) About behaviorism. New York: Vintage Books.

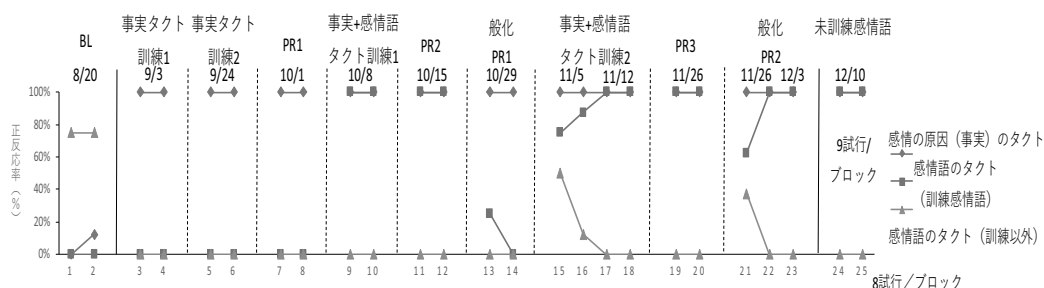


Fig.1 参加児1名における内的出来事のタクト課題の正反応率推移